

第1回会員研修会 <Web会議システムを活用したオンライン研修>
第75回 近畿養護教諭研究協議会 全体会

【記念講演】

「妖怪人間ベムは永遠に笑わない」

～『生きる意味』それは間（あわい）に～

令和4年8月2日（火）午後3時00分～午後4時30分

京都大学大学院 人間・環境学研究科 研究員 佐藤 泰子 氏



人間の苦しみと言語の関係を手掛かりに、「聴くこと」「語ること」の本当の意味、援助的聴き手としての養護教諭の役割を教えてくださいました。また、死生観に伴う命題「生きる意味への問い」についてのわかりやすい解説から、人間関係（間〔あわい〕）を端緒としたコミュニケーションの在り方についても言及されました。

1 言葉と苦悩

言葉を使って人間は物事を考えており、言葉がなければ考えることができない。人間は言葉を手に入れることで文明を発達させたが、それと同時に苦悩も手に入れた。全ての人間に苦悩がある。「そもそも苦しみとは何か」という「苦しみと緩和の構造」を理解することが援助につながっていく。

2 苦しみと緩和の構造と援助

①苦しみと緩和の構造

ばらばらに脳裏に浮かんでくる言葉は、「語る（発話すること）」により再構成される。するとメタ認知（客観視）が起こり、頭の中が整理されるので少し楽になるが、この段階で完全に苦しみから解放されるわけではない。

苦しみはある事態に「NO」を突き付けるところから始まる。「NOな事態」の反対側には、必ず「こうありたい事態」がある。「こうありたい事態」の反対のことが起こったとき、人はそれを「NO」とし、苦しみとなる。このとき、まずは「こうありたい事態」に向かって事態を動かそうとするが、それができない場合、「思い」を動かし始める（「こうありたい事態」と「NOな事態」の意味や認識の変更をする）。

② 「語る」こと「聴く」ことの意味

苦しい時に人が語るのは、物語の再構成をすると同時に、事柄の意味や認識を変更しているのである。したがって、語りの時、援助者は「聴くこと」が求められる。「はなす」とは「話して⇒離して⇒放す」ことであり、事柄の意味や認識が変更されたとき、ようやく「放す」ことができる。

真実や全体像は一つかもしれないが、見えている事実は人の数だけあり、同じ人の中でも立ち位置を変えれば見え方が変わってくる。見え方が変わってくることを援助者は「聴く」という行為をもって「待つ」のである。答えは当事者の中に控えており、人は自分の出した答えにしか納得しない。意味が変更されるまでは同じことを何度でも語るが、変更されると語らなくなる。養護教諭は、当事者の立ち位置、事柄の意味が変わった瞬間を目撃してきただろう。

③援助者の立ち位置

事柄の動かなさ（どうにもならない、どうしようもない）が、実存的苦悩（生きる意味がない、希望がない）につながってしまうことがある。援助者は、当事者の「苦しみと緩和の構造」のどこに立って支えるべきかを理解することで、援助の方法を見つけることができる。この判断と見立てが養護教諭に求められる。

ここで大切な第一歩は、子どもの苦悩をまずは受け取ることである。「このことがしんどいんだね」とそのまま受け取ってくれる人が1人でもいれば、子どもは次のステップ（事態を動かすのか、事柄の意味の変更をするのか）へ移ることができる。

3 非言語的伝達、「観る・察する」、「向き合う・寄り添う」

伝達方法には、言語的なもの（言葉、文字）と非言語的なもの（身振り、表情、話し方、態度など）があり、コミュニケーションでは後者の方が重要である。

感情や気分、大人への期待は、言葉で表現されないことが多い（特に思春期以降）。子どもはうまく伝えられないし、言葉も稚拙であるため、非言語（表情・態度）で伝達して行く。したがって、子どもを「観て」「察する」ことができる、即ち受け取る側の能力が問われる。言葉で説明される事態に寄り添いがちだが、事態には向き合い対処すべきで、それによって起こる（生まれる）感情や思いに寄り添うのである。

4 生きる意味

「妖怪人間ベム」に登場する3人の妖怪は、人間の役に立つ行為をしていればいつか人間になれると信じている。死ぬことができない妖怪は「早く人間になりたい」と、死の運命にある人間になりたがる。実写版のあるストーリーでは、生きる希望を失くし、死にたがる男性とともに物語が展開し、死生にかかわる重要な提言をしている。

自殺しようとした男性に、「おれたちは死ぬこともできず、ただ生きているだけ」とベムが言う。また、死ぬことができない妖怪たちの会話に次のような問いかけがある。「人間になったらいつか必ず死んじゃうんだよね、それでも人間になりたいって思う？」と。3人は「それでも人間になりたい」と語り合う。

もし、永遠に生きるならば「今」には、もはや意味がなくなる。いつか終わりがくるから「今」の意味が立ち上がってくる。たとえば、資格をとるための受験勉強など、永遠に生きるのであれば「今」やらなくてもいい。死なないなら医学や科学は求められないし、発展や努力は不要である。つまり、死は、限られた生の時間に意味を与える契機なのである。永遠のいのちをもつ妖怪よりも限りあるいのちを生きる人間を選びたい妖怪の思いにこそ、生の意味深さが読み取れる。

また、誰かとの間〔あわい〕に自分の「居場所」「生きる意味」がある。生きるとは、「誰かという」ただそれだけのことかもしれない。子どもたちにとって一番大切なものは誰かとのつながりである。

人間の悲喜をよくよく観ると、今の幸せは、過去の苦勞や苦しみなどの経験に常に支えられている。裏を返せば、現在の苦しみは、将来の幸福を支える土台になるために今ここにある。